

4. 活動を通じた地域との連携 ～学生と地域をつなぐ～

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達へ向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフを中心となって提供しています。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

事業名	サマーフェスティバル2019（継続企画6年目）
日時	2019年8月21日（水）12時30分～16時30分
場所	京都市深草児童館
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	ボランティア参加者41名（学生スタッフ31名、一般学生10名） 深草児童館参加者58名
企画メンバー （学生スタッフ）	吉田 樹（法学3） 西村志穂（政策2） 福島麻斗（政策2） 田渕真玖（文学1） 濱田 葵（文学1） 川根脩那（経済1） 石井翔大（法学1） 園原 聖（法学1） 竹内祐人（法学1） 谷垣俊弥（法学1） 藤原壱成（法学1）

1. 経緯・目的

深草児童館には歴代の学生スタッフが定期的にボランティアに行かせていただいております。2009年に初めて学生スタッフ企画の実施場所の一つとして活動を受け入れていただいた。そのつながりで2013年に中止になった『深草ふれあいプラザ』で行う予定だった防災劇をさせていただくことになった。これが好評であったため、今後も楽しめる企画を一緒に作ってほしいと児童館と共同で始めたのがこの企画である。

夏休み中の児童館は通常とは異なり、子ども達は朝から夕方までの長時間、児童館に滞在することになる。そこで、深草児童館に通う子ども達と龍谷大学生を繋げ、「遊び」を通して夏休みの最高の思い出をプレゼントしようと2014年からサマーフェスティバルが始まった。さらに、この企画は初めてボランティアをする龍谷大学生にボランティアの魅力を知ってもらいやすく、次のボランティアにつながりやすいイベントではないかと考え、今年も以下の事項を目的として実施した。

- ①普段できないような遊びを通して、子ども達に夏休みの最高の思い出を提供する。
- ②私たち大学生が童心に帰って子どもと同じ目線で楽しみつつ、子ども達にとって大人のモデルであることの自覚を持ち行動する。そして将来子ども達がボランティアを始める契機にする。

- ③参加学生にボランティアの楽しさに気づいてもらい、次のボランティアへつなぐきっかけにするとともに、本企画を通じて「児童館」という場を知ってもらいたい。

2. 概要

1) プログラム内容

竹水鉄砲／段ボールフリスビー／紙相撲／工作

2) 当日までの動き

5月中旬：児童館より正式依頼があり、実施決定

7月上旬：企画メンバーで話し合い、プログラム内容を決定

7月中旬：学内でのボランティア募集開始

8月3日（土）：竹水鉄砲用の竹切り作業

※竹切りに使用した竹は、『NPO 法人竹と緑』から提供いただいた。

8月7日（水）：竹水鉄砲制作



8月20日（火）：リハーサルを行い、最終調整
一般学生6名参加

3) 当日のスケジュール

- 11:00 センター集合。アイスブレイク、勉強会、各プログラムに分かれて打ち合わせ後、児童館へと出発
- 12:30 深草児童館到着、準備開始
- 13:30 開会式後、サマーフェスティバル開始。竹水鉄砲、段ボールフリスビー、紙相撲、工作の4ブースに分かれて同時進行
- 15:20 ゲーム終了後、表彰式と閉会式を行うボランティア参加者にアンケート形式で振り返り
- 16:30 活動終了、深草児童館で解散



3. 参加者の声・得られた効果など

1) 一般参加の学生の声

- ・子ども達が元気で逆にエネルギーをもらった。
- ・参加前はいろいろ不安なことはあったが、実際にはそんなことはなくとても楽しく取り組めた。

その他、タイムスケジュールの急遽変更によく対応できていたという意見や、竹水鉄砲にもう工夫あれば良かったという意見もあった。

2) 学生スタッフの声

- ・子ども達の表彰式での歓声や盛り上がりからとても楽しんでもらえたと思う。
- ・深草だけでなく瀬田の学生とも一緒にボランティアができたことにより、互いの企画に興味を持つきっかけになったと思う。
- ・例年課題とされていた大幅な時間のズレや交代時のてこずり、ごたつきを改善するために、子どもの各チームに1人ずつ学生を

配置した。その結果、交代はスムーズに行うことができ、時間のズレもなく予定通りに終えることができた。

4. 学んだこと・今後の課題

[準備段階]

- ・企画責任者と副責任者の情報伝達や打ち合わせの仕方が甘く、あるべき姿のミーティングができなかった。
- ・情報共有が遅くなったことにより、参加を取りやめた一般学生がいた。
- ・作業のとりかかりが遅く、準備が全体的に後ろに押してしまった。
- ・前日リハーサルのための準備が十分ではなかった。

[当日]

- ・学生同士や児童館の職員さんと細かく定期的に情報共有をすることで、各ブースの時間のズレや誤差が発生しても素早く正確に対処できることを学んだ。
- ・竹水鉄砲を終えた子ども達からクーラーが寒いという声があり、児童館の職員さんから子どもが着替える時間も考えてスケジュールを組んでほしいという新たな課題をいただいた。
- ・遊びの内容やルールが全体的に淡白であるという声もあったので、遊びの内容や雨天時の遊びなどをもっと深く詰める必要がある。



5. 経 費

テープ、プログラムで使用した備品等に必要な経費は全額深草児童館より支出。(約10,000円)
大学からの支出は下記のみ

A4サイズ用紙500枚（広報用） 240円

〈報告者：西村 志穂〉

事業名	大津祭へのボランティア協力（継続企画14年目）
日時	①2019年 7月 8日（月）～ 8月 2日（金） 学内広報Ⅰ ②2019年 7月 9日（火） 12時35分～13時35分 学内広報Ⅱ ③2019年 8月11日（日） 15時00分～17時00分 事前勉強会・町歩きⅠ ④2019年 9月 6日（金） 15時00分～17時00分 事前勉強会・町歩きⅡ ⑤2019年 9月 8日（日） 15時00分～17時00分 事前勉強会・町歩きⅢ ⑥2019年 9月 9日（月） 15時00分～16時30分 事前交流会 ⑦2019年10月 6日（日） 11時00分～16時00分 巡行サポーター説明会・曳初め ⑧2019年10月12日（土） 台風のため中止 宵宮 ⑨2019年10月13日（日） 7時00分～18時00分 本祭
場所	・瀬田キャンパス内、深草キャンパス内（①） ・瀬田キャンパス野外ステージ前（②） ・大津祭曳山展示館、大津中心市街地（③、④、⑤） ・瀬田キャンパス学生会館カンファレンスルーム（⑥） ・大津市中央市民センター4階大会議室、大津中心市街地（⑦） ・大津中心市街地（⑨）
主催	特定非営利活動法人 大津祭曳山連盟
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	実人数43名（学生スタッフ20名、一般学生23名） ③ 3名（うち学生スタッフ 1名） ④15名（うち学生スタッフ 9名） ⑤10名（うち学生スタッフ 4名） ⑥21名（うち学生スタッフ15名） ⑦11名（うち学生スタッフ 5名） ⑨39名（うち学生スタッフ17名）
企画メンバー （学生スタッフ）	川崎良祐（理工3） 石川秀凱（社会3） 澤 優希（社会3） 正中菜帆（社会3） 赤木宏斗（社会2） 木ノ上莉那（社会2） 高岡宏幸（社会2） 土肥亮太（社会2） 余村瑠香（社会2） 大屋晴太郎（農学2） 朝野健太（社会1） 吉岡秀太（社会1）

1. 経緯・目的

- ・国指定重要無形民俗文化財に指定されている大津祭にボランティア参加することで、龍大生に大津祭の伝統・文化について学び、知ってもらおう。
- ・大津祭に限らず、大津祭曳山連盟が行っている地域活性化に関する活動を知り、新たな大津祭企画としての視点を広げる。
- ・企画メンバーの大津祭についての知識向上を図り、一般学生に大津祭の魅力を広く伝える。

2. 概要

①学内広報Ⅰ

- ・チラシ配布
- ・学生会館エキシビションの展示
- ・青志館食堂、青雲館食堂、学生会館アッセンブリーへの三角柱設置
- ・授業前広報
- ・ポスター、立て看板設置

②学内広報Ⅱ

- ・大津祭曳山連盟の方々のお囃子実演
- ・ボランティア募集のチラシ配布

③④⑤事前勉強会、町歩き

- ・大津祭曳山展示館訪問
- ・大津祭曳山連盟の方からの大津祭の説明
- ・大津中心市街地（旧大津公会堂、大津市立中央小学校、天孫神社）の散策、見学

⑥事前交流会

- ・ボランティア参加学生への大津祭の紹介
- ・参加学生の顔合わせ、交流

⑦巡行サポーター説明会、曳初め

- ・巡行サポーター説明会
- ・月宮殿山、源氏山の曳初め

⑨本祭

- ・西王母山の曳き手
- ・垂れ幕を持ち、観客の安全確保
- ・曳山巡行の先導
- ・神輿の警備、巡行サポート

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・ただ祭に参加するだけではなく、大津祭の歴史を知ることができる機会があったので、勉強になった。
- ・昨年も参加し、地元の方が覚えていてくださり、声をかけていただき嬉しかった。
- ・初めて参加したが、地元の方々と話をする事ができ、よい経験になった。
- ・地域の団結力を感じることができ、祭に参加することで、その一員になれたと実感することができた。
- ・一日中曳山を曳いて歩き回り疲れたが、地域と一体となって盛り上がることができ、達成感があった。



4. 学んだこと・今後の課題

- ・昨年、ボランティア申込用紙の不備等により、参加者のLINEグループを作るまでに苦労した経緯があった。そのため、今年は申込用紙の項目を修正した。また、申込用紙を提出してもらった時点でLINEグループに招待することで、情報共有のためのグループづくりは比較的スムーズにできた。
- ・事前に連絡することが沢山あり、重要な情報が十分に伝わっていなかった可能性がある。
- ・活動中、いつ休憩があるか、トイレの場所はどこかなどがわかりにくかったという参加者の声があった。資料を事前に共有しているが、当日の流れや状況を口頭でも伝える必要があった。
- ・長い空き時間をどう過ごしてよいか悩んでいたという声があった。学生スタッフ同士で固まり、一般学生に対して十分に対応することができていなかった。学生スタッフとしての自覚を持ち、参加者への声かけなどをする必要があった。

要があった。

- ・募集の時点で、祭の時間が長いことや、曳手のボランティアは体力が必要なことなどを丁寧な伝えたほうがよい。
- ・今年も参加者が多かった。昨年より変更し、事前勉強会を全参加者対象に実施したり、事前交流会でも大津祭について説明したりする事で、参加学生に大津祭についてより深く知ってもらえるように心掛けた。終了後のアンケートにも「学ぶ事もあって楽しかった」「素晴らしい祭りに参加して良かった」などの感想が多数あった。参加学生に大津祭の伝統・魅力などが伝わり、楽しんでもらう事ができたため、この企画の目的は達成されたと考えている。
- ・今回、大津祭に参加させていただくことで、龍谷大学がある大津市の伝統文化やその魅力、それを受け継ぐ難しさや大切さを学ぶことができた。大津祭曳山連盟の方々には、学内でのお囃子実演や、事前勉強会で大津祭の歴史、意義、特徴などについて説明いただくなど、多くのご協力をいただいた。伝統ある大津祭を非常に大切にされている事、その伝統を若い私たちに知ってほしい、受け継いでほしいという強い思いを感じた。私たち自身もこの思いに共感しており、大津祭曳山連盟の方々を始めとした、地域の方々の思いをしっかりと胸に留め、来年以降もこの企画を続けていきたいと思う。



5. 経 費

消耗品	530円
企画メンバー交通費	3,440円
ボランティア保険	3,300円
合 計	7,270円

〈報告者：土肥 亮太、大屋 晴太郎〉

事業名	第29回深草ふれあいプラザへの協力（継続企画9年目）
日時	2019年10月20日（日）9時00分～16時00分
場所	藤森神社（京都伏見区深草）
主催	深草ふれあい事業実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	52名（一般学生21名 学生スタッフ31名）
企画メンバー （学生スタッフ）	玉川隆明（文学4） 松岡俊希（法学3） 武村祐資（政策3） 神田瑞季（経済2） 黒崎雄太（経済2） 松尾宗次朗（経済2） 山崎迅一郎（経済2） 森清文聡（法学2） 世田丈貴（法学2） 平尾萌衣（政策2） 福島麻斗（政策2） 田淵真玖（文学1） 濱田 葵（文学1） 早川歩伽（文学1） 川根脩那（経済1） 永野凌平（経営1） 林 新（経営1） 石井翔大（法学1） 園原 聖（法学1） 竹内祐人（法学1） 谷垣俊弥（法学1） 小林初音（国際1）

1. 経緯・目的

『深草ふれあいプラザ』は、深草地域の団体（小学校、消防署、警察署、児童館、社会福祉協議会など約40団体）が集まり、互いに交流することで深草地域への愛着と世代間や地域間の結びつきを深めるためのイベントである。

私たち学生は同世代の人と関わる機会が多い一方で、他世代の人と交流する機会は乏しい。世代間や地域間の交流が盛んな深草地域であっても、学生などの若い世代の参加が少ないように感じられる。そこで、ボランティア・NPO活動センター（以下、センター）がこのイベントに関わらせてもらうことで、龍谷大学生と地域の方々が交流できる機会を設けることができ、参加者自身が深草地域の一員であることを認識できる場になると考えた。特に以下の3点を目的として実施した。

- ・龍谷大学生が地域のボランティアに関わることで、他世代のコミュニティに参加できるきっかけにする。
- ・事前に勉強会で深草地域について知ってもらうことで、自分の大学がある地域に関心を持ってもらう。
- ・センターの活動などを発信できるブースを設け、深草地域の方々にセンターのことを知ってもらう。

2. 概要

○事前勉強会『ふれあいの集い』

ボランティア参加学生に10月15日または17日にセンターへ集まってもらい、活動当日の説明を兼ねて深草地域の歴史や名産品を伝えて興味や関心を持ってもらう『ふれあいの集い』を

実施した。その時使用したスライドは、企画メンバーが調べ出してオリジナルのものを作成した。



○イベント当日

以下のイベント運営の補助やセンターのブース運営を行った。

- ・地域の方が運営している模擬店の販売や、看板での案内、ごみ分別、くじ引き等各種ブースの補助
- ・センターのブース出展（展示ブースと子ども遊びブース）
- ・着ぐるみの着用及び補助
- ・ステージプログラムの一部である「5学区対抗戦」の司会と補助

3. 参加者の声・得られた効果など

ボランティア参加者がどのようにしてこのボランティアを知ったかアンケートを取ったところ、42%もの人が昼休みのチラシ配りで知ったというデータが出た。積極的にボランティアの呼びかけをすることで一般学生の増加につながる事が分かった。活動については、参加学生から次のような感想があった。

- ・初めてのボランティアだったが、すごく楽し

めた。

- ・子どもから高齢の方までいろいろな人との交流ができたし、ボランティア同士の交流もあって楽しかった。
- ・また来年も参加できたらいいなと思った。
- ・地域のお祭りで、つながりを感じられた。

今年は過去で一番多くのボランティア参加学生数を達成する事ができ、その中のほとんどの人が参加しての満足度が高かった。また、感想にも「また参加したい」「いい経験になった」という声が多数寄せられており、ボランティアの啓発や最初の一步を踏み出してもらうために実施した企画としては、私たち学生スタッフにとっても一般学生にとっても有意義なものになったのではないかと感じた。

4. 学んだこと・今後の課題

去年から反省点に挙げられている休憩に関しては概ね12時前後の想定の時間帯に取る事ができたが、模擬店のピークと自分達を取りたい休憩時間帯が重なってしまい、なかなかスムーズに交代することができなかった。

前日までの作業に関しては夏休みに入る前に役割分担をしておく事により、準備期間を長く



取る事ができた。余裕を持って準備できたので、当日が近づいてもあわてる事はなかった。

また、広報については、チラシ配りのほかにも立て看板や通りがかりで知るなど様々な方法で知られる可能性があるため、出来る限り色々な方法、媒体を通じて広めていく努力が必要だと感じた。

5. 経 費

展示物作成用消耗品（プラダン購入）	3,179円
子どもブース用お菓子	1,447円
合 計	4,626円

〈報告者：黒崎 雄太〉

事業名	スペシャルオリンピックスを知ろう（継続企画3年目）
日時 場所	事前交流会：2019年10月21日（月）17時30分～19時00分 龍谷大学瀬田キャンパス学生交流会館カンファレンスルーム ボランティア体験：2019年11月2日（土）10時00分～13時00分 エースレーン近江八幡（滋賀県近江八幡市出町）
主催	スペシャルオリンピックス日本・滋賀
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	事前交流会：8名（うち学生スタッフ6名） 運動会当日：17名（うち学生スタッフ9名）
企画メンバー （学生スタッフ）	中川和謙（理工3） 頼田翔平（理工3） 田井拓暉（社会3） 余村瑠香（社会2） 近藤真佑華（農学2） 家原美月（社会1） 井尻由梨香（社会1）

1. 経緯・目的

私たちはこれまでの企画から、健常者も知的障がい者とともにスポーツを通して垣根なく楽しめることを知った。しかし、スペシャルオリンピックスの認知度は、まだまだ低いと感じたため、スペシャルオリンピックスの存在を龍大生に知ってもらう機会としてこの企画を実施す

る。

健常者も知的障がい者も一緒に楽しめるスポーツを通じて交流を図り、相互理解を深める。そして、今後どのような関係性をつくっていけばよいのかをみんなで考えるきっかけにしたい。

2. 概 要

(1) 事前交流会・説明会内容

- ・参加者間での交流
- ・スペシャルオリンピックスについての説明
- ・参加する上で気をつけること

(知的障がい者との接し方など)

参加者間での交流は、企画メンバーが担当し、スペシャルオリンピックスについての説明と、参加する上での注意事項については、スペシャルオリンピックス日本・滋賀の藤川氏と檜山氏にお話いただいた。

(2) ボウリング大会でのボランティア体験

- ・アスリートとボランティア学生が二人一組のペアになり交互に投球を行い、2ゲームを行った。
- ・スコアの高かった上位3組のペアを表彰した。
- ・昼食は、スペシャルオリンピックス日本・滋賀に提供していただき、レーンごとに食事しながら楽しく交流した。
- ・ボウリング中に使う応援グッズをレーンごとに協力して作製してもらった。
- ・アスリート、学生ボランティア、関係者など、約100名が集まり、それぞれのペア、レーンごとに楽しく活動することができた。

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・アスリートの方々と一緒にゲームや応援をして、大いに盛りあがった。
- ・普段関わることの少ない知的障がい者の方々と交流し、ゲームを楽しむことができた。
- ・最初はお互い緊張していたが、明るく笑顔で接すると初対面のアスリートの方々も笑ってしゃべってくれるようになり、うれしかった。
- ・知的障がい者の方々と話したり、交流する機会は少ないので、非常によい経験になった。
- ・障がいがある方との交流を今までしたことがなく、このボランティアに参加するまでは不安で心配していたが、まったくその心配は杞憂で、むしろ一緒にゲームを楽しめた。
- ・ボウリングでストライクが出た時など、うれしかったり、興奮したりして、一緒に感動を分かち合うことができた。
- ・障がいのある方とどう接したら良いのか不安だったがこのボランティアを通していろんな話ができ、仲良くなることができた。



4. 学んだこと・今後の課題

- ・ボランティア募集期間が短かったため、十分に広報できなかった。昼休みに食堂前でのビラ配り、センターに来室した一般学生に参加を募る、授業前広報を行う等のほかに、一般学生の参加を促す方法をいろいろ工夫する必要がある。
- ・ボウリング大会当日と深草龍谷祭の日程が重なり、一般学生の人数が予定していたよりも少なくなった。
- ・昼食をとる際、会話が止まってしまう、黙々と食事をする人もおり、アスリートとボランティア学生が話しやすくなるよう、企画メンバーから働きかけをすればよかった。
- ・各レーンのアスリート参加者の数を把握しきれず、人数調整のため、開始の時間が遅れた。あらかじめ当日参加する人数を把握し、欠席者の連絡をスムーズに行うことが必要である。
- ・アスリートとボランティア学生が二人一組になって競技を行ったことにより、アスリートと学生の距離が縮まり、一緒に競技をしているという一体感が生まれた。スペシャルオリンピックスが目指しているユニファイドスポーツ（障がいのある人とない人が混合チームを作り、スポーツを通じてお互いを理解し支えあう関係を作る取り組み）を行えたと思う。
- ・今回の企画が、参加した学生にとって、障がい者と関わり、お互いを知り合うきっかけとなった。またスポーツを通して、一緒に楽しんだり、協力できるということを知ってもらえたと考えている。今後も、このような機会を提供いただいたスペシャルオリンピックス日本・滋賀との関係を持ち続け、より多くの方々にスペシャルオリンピックスとアスリー

トに対する理解を広めていきたい。

交通費

3,710円

合 計

7,685円

5. 経 費

消耗品（応援グッズ作成用） 3,975円

〈報告者：余村 瑠香〉

事業名	南区民ふれあいまつり「ちびっこひろば」へのブース出展（継続企画5年目）
日時	2019年11月10日（日）10時00分～15時00分
場所	東寺（教王護国寺）
主催	南区民ふれあい事業実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	20名（一般学生3名、学生スタッフ17名）
企画メンバー （学生スタッフ）	中川寛喜（経済3） 樋口大輝（政策3） 西村志穂（政策2） 平尾 萌衣（政策2） 福島麻斗（政策2） 田渕真玖（文学1） 濱田 葵（文学1） 早川歩伽（文学1） 竹内祐人（法学1） 谷垣俊弥（法学1） 藤原壺成（法学1）

1. 経緯・目的

現在の龍谷大学ではゼミなどでまちづくりに関わり、地域住民と接することが多い学部もあるが、そういった機会が少ない学部もある。そんな学部生にもボランティア活動を通して地域に関心を持ってもらい、地域住民の方々と交流できる場を提供したい。

東寺で開催される「南区民ふれあいまつり」は、住民の交流や愛着意識を高めてもらうためのイベントで多くの来場者があり、世界遺産を会場に開催されるのは他のボランティアにはない魅力であると考えた。そのため、以下のことを目的にブース出展を行う。

- ・「南区民ふれあいまつり」のうち、子ども向けの『ちびっこひろば』で工作や遊びのブースをセンターから出展し、歴史ある東寺で地域住民とふれあえる活動として龍谷大学生へ参加を呼び掛け、今後のボランティアのきっかけにしよう。
- ・ブースに足を運んでくれた子ども達にゲームやものづくりを通して、龍谷大学生とお祭りの思い出を作ってもらおう。

2. 概 要

『ちびっこひろば』にて、以下のブースを出展した。

(1) 空気砲の的当て

画用紙で作った的を、ペットボトルの空気砲で倒していくゲーム。的は3つ設置しておき3発

中、倒せた個数によって景品であるアメ・ラムネなどを配布した。

(2) 虹色望遠鏡

学生と子ども達が会話をしながら、最後の仕上げである画用紙に絵を描いてもらい、紙コップに貼り付けた。

これらの活動内容に対してシフトを組み、ブース運営という形で子ども達にルール説明や誘導、一緒に作業を行うことをボランティア内容とした。



3. 参加者の声・得られた効果など

○参加者の声

- ・たくさんの子ども達が来てくれて、楽しそうだったし、ボランティアしている側も楽しかった。
- ・ボランティアの活動だけでなく地域の方々との交流、ふれあいも重要であると学ぶことができた。

- ・他の参加学生をはじめ、地域の子どもから大人まで様々な方と交流できたことが楽しかった。
- ・機会があれば他のボランティア活動にもどんどん挑戦したい。

上記の声から、地域の方々との交流だけでなく、参加者間でも交流ができたこと、また、参加者アンケートから地域のお祭りなどのまちづくり分野への参加意欲を感じることもできた。

今回は、当日までの作業を一人一人が時間を見つけて取り組んだり、企画メンバー以外の学生スタッフの協力もあったので、工作準備については余裕をもって完成することができた。

4. 学んだこと・今後の課題

○当日

- ・遊びの空気砲では、行列の整理ができておらず、最後尾が分からなくなっていた。今回はボランティアの人数が少なかったので、コーンを置くなどわかりやすくする工夫が必要だった。
- ・空気砲の景品としてお菓子を用意していたが、小さい子どもは飴が食べられないなど、保護者の方が気にしていたので、経費が余っていれば飴だけでなくラムネなど増やせるとよかった。
- ・工作の虹色望遠鏡では名前から想像が付きにくく、何を作っているのかわからず迷っている方がいたので、口頭で説明をするなど対応できたが、事前に説明書きなど用意しておくよかったと思った。

- ・虹色望遠鏡を完成した状態まで準備していたため、子ども達が絵を描くだけになり、去年ほどの関わりができていなかった。

○準備

- ・南区についての資料を作ろうと試みたがまとまらず、チラシと合体することにしたため、チラシ完成に時間がかかり広報期間が2週間しか取れなかった。このことも影響したのか、今回の一般参加者は3名と少なかった。
- ・他の企画や班ミーティングが重なっており、本企画のミーティングをする時間を取れず、共有しきれないことがあった。放課後など、集まれる時間を少しでも設けるべきだと感じた。

5. 経 費

南区民ふれあい事業実行委員会より必要経費が支出されたため、経費なし。



〈報告者：平尾 萌衣〉

事業名	「防災・減災そなえパークの日」へのブース出展（継続企画6年目）
日時	事前交流会：2020年3月6日（金） 当日：2020年3月8日（日） ※新型コロナウイルス感染拡大防止のためイベント中止
場所	滋賀県営都市公園びわこ文化公園 催し物広場及び公園管理事務所
主催	滋賀県営都市公園びわこ文化公園 指定管理者 びわこ文化公園ゆうゆうパートナーズ
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加予定人数	交流会：23名（うち学生スタッフ 15名） 当日：26名（うち学生スタッフ 15名）
企画メンバー （学生スタッフ）	樋上翔太（理工3） 木下綾華（社会2） 高岡宏幸（社会2） 南 佳奈（社会2） 渡中新太郎（農学2） 井尻由梨香（社会1） 林 大誠（社会1） 大和虹輝（農学1）

1. 趣旨・目的

近年、日本では、地震、そして台風や豪雨などを含め、災害が多く発生している。地域の人々や龍谷大学生に防災知識を学んでもらうと同時に、防災・減災への意識を高めてもらいたいと思い、びわこ文化公園で行われるイベント「防災・減災そなえパークの日」にブースを出展する。

この企画は2014年から継続して実施している企画である。今年は、台風15号や台風19号による暴風や大雨が人々の生活に甚大な被害を及ぼした。そこで今回のブースでは、水害、風害への防災減災知識を重点的に扱い、参加して下さった方への学びの機会とする。また、自然災害は他人事ではなく自分の身に起こり得る事として、防災意識を少しでも高めてもらいたいと考えている。昨年度までは参加者である地域住民同士をつなげるという目的でブース運営を行っていたが、今回は、防災知識・防災意識を高めることを主な目的として企画した。

2. 概要

(1) 打ち合わせ

びわこ文化公園、協力団体との事前打ち合わせ
第1回：2019年12月4日（水）
第2回：2019年12月19日（木）
第3回：2020年1月18日（土）

(2) 広報手段

授業前広報、チラシ配り

(3) 準備

イベント当日は、①避難所再現ブース②展示コーナーの運営を予定していた。そこに龍谷大学生にボランティアとして参加してもらいながら、共に学べるように考えた。

①避難所再現ブース

- ・ブースに未完成な日本の避難所を再現
- ・避難所で起こると想定されるトラブルについて参加者に考えてもらうコーナー（クイズなど）

②展示コーナー

- ・災害時に役立つ知識
- ・スフィア基準について
- ・海外（イタリア）と日本の避難所の比較
避難所の比較については、意見や感想を書いてもらう。

(4) イベントの中止とその後の対応について

- ①2020年2月26日（水）中止の連絡が入る。
イベント主催者である、びわこ文化公園より、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、中止するという連絡を受けた。
- ②中止の連絡を受けて、参加予定だった一般学生、学生スタッフには、LINEのグループを利用して連絡をした。LINEグループに入っていない一般学生には、メールで連絡をした。
- ③打ち合わせ等で協力していただいた団体には、個別でお礼の連絡をした。
- ④今後について
2020年度の龍谷祭の展示ブースにて、避難所再現や展示をする予定である。

3. 学んだこと・今後の課題

(1) ミーティングについて（チームづくりについて）

- ・ミーティングをする前に、前もってやる事を情報共有して、アイデアをあらかじめ考えてもらうようにした。意見をすぐに出してもらう事が出来て、効率よくミーティングを進め

ることができた。

- ・企画を最初からつくっていくことの大変さを実感した。
- ・企画を進めていくうえでメンバー同士の苦手分野を補い合うことが大切だ。みんな得手不得手があるので、お互いのことをわかって活動できるのは学生スタッフの強みだと思う。
- ・メンバーそれぞれが担当する仕事や役割に一生懸命取り組めた。
- ・メンバーの仲が良く、遠慮せずに意見の言える場になったのが良かった。悩んだ時にみんなに相談して解決できたことが良かった。

(2) 学生スタッフの感想

- ・最初は、自分のアイデアをあまり自発的に言えなかったが、ミーティングを重ねることで積極的に自分のアイデアを言えるようになった。
- ・これまでボラセンの活動に参加していたものの、受け身が多かったが、上回生として積極的に動くことができた。
- ・自分のチームの中での役割がわかった。
- ・自分の得意、不得意が少しわかった
- ・一回生がたくさん意見を述べてくれる中でみんなの意見をまとめていく、合意形成の難しさを身をもって体験できた。
- ・新しいことを考えるのは苦手だと感じていたが企画で案を考えることに楽しさを感じた。
- ・要点をまとめて説明するのが苦手なんだと気が付くなど、自己分析の機会でもあった。

(3) 防災について

この企画をよりよいものにするために、防災に関してのセミナーに参加した。外国籍の方が

ボランティア募集

「防災・減災そなえパークの日」

2020年3月8日(日)

9:00～17:00



防災・減災そなえパークって？

憩いの場であり、かつ防災拠点となる公園でみんなと楽しみながら、個人および地域の防災・減災意識を高めるイベントです。また地域交流の場にもなっています。



昨年度の様子
大津市東消防署による
消防車試乗体験

このボランティアはこんな方におすすめです！

- ・防災・減災に関心のある方
- ・地域交流に関心のある方
- ・何か新しいことに挑戦してみたい方
- ・ボランティアは初めてという方

一事前交流会・説明会があるので、安心してご参加ください。

皆様のご参加、心よりお待ちしております

【連絡先】
 ボランティア・NPO活動センター
 (瀬田キャンパス)
 TEL: 077-544-7252
 E-mail: ryuvc@ad.fyukoku.ac.jp

(学内募集のために作成したちらし)

避難所にいる時を想定した研修であったが、英語など他言語を使わなくても、「やさしい日本語」で話したり、ジェスチャーを使えばコミュニケーションをとることが出来るとわかった。また、避難所運営の難しさも学べた。

4. 経 費

支出なし

〈報告者：渡中 新太郎〉